

# 法身觀の發達

保坂玉泉

佛教徒の信仰の對象は佛法僧の三寶であることは申す迄も無いが、佛教の變遷發達につれて三寶の觀念殊に佛の觀念にも變遷發達があつて、一概にその内容を定めることは出来ぬ。釋尊の入滅は佛弟子佛教徒の信仰に動搖と變化との機會を作つた。佛在世時代の佛教徒は三寶を歸依處としつゝも佛陀の人格を最尊最上なりとし之を信仰の對象とし所謂佛法中心主義であつたが、釋尊の入滅佛陀色身の死滅の事實は最早無條件に佛身崇拜を許さなくなつた。それは死滅せる佛身即ち無なるものは信仰の對象とならぬからである。そこで佛陀入滅後は何を信すべきやは、先づ佛陀の在世中の説示や臨終の教誡に依つて定むるより他なしとした。之に就て佛陀は阿難等に佛滅後は自燈明法燈明に依るべきことを訓誡された。佛陀の色身は入滅すと雖もその遺教正法の光は常に世に存して滅せず永く衆生の迷闇を照破するとの信仰が起り、更に佛の肉身は假身で、永久不滅の教法こそ佛の眞身であるとの觀念から、茲に教法を佛の眞身と見る法身觀が起つた。是れを吾人は教法法身觀と名ける。『增一阿含經』四十四に「我が釋迦文佛は壽命極長なり、然る所以は肉身滅を取ると雖も法身此に存す。」と云へるものこれであつて、佛滅後に於ては佛弟子の信仰の對象が教法即ち法寶となり、法寶中心の佛教となつた。『中阿含經』三十六瞿默目鍵連經に大臣雨兩勢なるものが、多聞第一阿難に、佛滅後何を所依とすべきやの問に對し、

我等は人に依らず法に依る」と答へたのは佛寶中心の信仰から法寶中心の信仰への轉化を明かに物語つてゐる。

佛敎に於ける達磨即ち法の觀念にも種々なる發達があつた。原始經典で法律と云はるゝ時は法と律とのことで、その法とは經の義、佛の説き玉へる敎を指すやうに、法は主として人爲的道德法を意味する場合もあり、小乘阿毘達磨佛敎の如く道德法と自然法との一切現象を法の觀念内容とする場合もあり、更に大乘に至つては宇宙の眞理法界を法の内容とする場合もある。此の如く法觀念の種々なる發達に伴うて法身觀の發達があつた。前述の如く原始佛敎では法身とは敎法それ自身であつたが、小乘敎時代に到れば敎法の由つて來る根元を佛陀の人格徳性に求め、この徳性を分ちて戒、定、慧、解脫、解脫知見の五徳を法身とし之れを五分法身と稱し、これを佛陀の眞身と見、佛陀の肉身は亡びて有限なるもこの五分法身は常在不滅無限であると信ぜられた。法身觀の内容は一步進んだのである。五分法身説は既に『雜阿含』四十二、『中阿含』十等に出で、『婆娑』『俱舍』『成實』等に論ぜられた所で、戒身とは佛の無漏清淨なる身口の業即ち持戒の徳、定身とは無漏の三昧即ち禪定の徳、慧身とは無漏の正智即ち智慧の徳、解脫身とは煩惱束縛を解脫せる自在の徳、解脫知見身とは解脫せることを知見する自覺の徳を云ふので、是れ畢竟佛陀の人格の本質、覺者の精神内容たる徳性に外ならぬ。『成實論』には開卷第一に佛に歸依すべき所以として先づ第一に五分法身を成就せられしを説き、小乘薩婆多部にては四階成佛説を立つるのであるが、如來の三十二相等の肉身は第二階の修行にて成就するも五分法身は四階通修でなければ圓滿することは出来ぬとして、その佛身修得に就て優劣を見てゐる。これその永恆性の有無に係る所で、果して『婆娑論』三十には「如來の法身は衰退なしと雖も而も生身の力は必ず退滅あり」と云うてゐる。依然として法身不滅の思想である。而して『五敎章』下にては此『婆娑論』の法身を五分法身なりと解釋してゐる。

佛に十號ある中、第一の「如來」とは具に如來如去の義、如實の道より來り、復た如實の道に去ること、第三の正徧知とは眞理を如實に覺知すること、第五の善逝とは善く眞理の世界へ還り逝くの義、第十佛とは具に佛陀、覺者と譯す、眞理を覺れる者の義で、是等十號に就て見るも、佛とは畢竟如實の道、眞如、眞理の體驗者であり、眞理は實に佛陀自覺の内容である。前述の五分法身は此自覺への過程で、此過程に依りて佛陀の正智開發し眞理を證觀し理智冥合して佛陀最上の人格を完成したのである。佛滅後佛の眞法身を探求して止まず、法身の常在不滅の要求に驅られ佛身の本質を與へ與へと尋求して教法法身觀より五分法身觀へ、五分法身觀より眞如法身觀へと進んだのである。是れ一面には哲學的形而上的眞如思想の發達に伴ひしもので、此思想は大乗教の時代を劃するに至つたのである。眞如法身の思想は實に大乘教の本質的なもので、眞如を立つると否とに因つて大小二乘を區別する程であつた。五分法身思想と眞如法身思想とを比較するに、前者は如來の主觀的能證の正智を法身と寫象したもので、後者はその客觀的所證の眞理を法身と寫象したもので、兩者の思想的關係は正智より眞理への進歩、人格的佛陀より超人格的形而上的實在への發展で、釋迦佛の人格を超越し、本來の實在、恒久普遍なる實在たる如來の本體への世界へと突進したもので、大乘教は各派その佛陀觀に多少の相違があるけれども、然し何れの宗派と雖も眞如法身を佛陀の本質と觀ないものは無い。

眞如法身觀の代表的なものは『起信論』である。本論に於ては一心二門三大四信五行の組織を立て、その信仰の對象として從來の佛法僧の三寶の上に眞如を加へて四信としたのは、三寶の根元本質を眞如と見、眞如を最上なりと見たもので、その眞如法身を説く委曲を盡してゐる。これより先、眞如法身の常在不滅の思想を高調した經典は第一に『涅槃經』、第二に『法華經』であらう。前者は眞如法身は恒久普遍の實在であるから、一切衆生も眞如法身の顯現で、従つて悉く成

佛可能で、釋尊入滅後末法の衆生と雖も不滅恒存せる本具の眞如即如來性を發揮すれば成佛が出來ると見るのである。この涅槃宗が此經を佛性常住教と判じ、天台智者大師が扶律談常の教、末代贖命の教なりと判じた所以である。後者『法華經』は二十八品より成り前十四品は迹門と稱し、人間としての釋尊の教化を記し、その後十四品を本門と稱し、釋迦佛の本地本體たる久遠實成の如來を開顯高調してゐる。これ永恒實在の眞如法身佛に外ならぬ。新法華行者日蓮聖人は之を妙法なりとし此妙法を信仰の對象たる本尊とせられたのである。淨土教の如きは彌陀如來を以て人格的に寫象し何處迄も理想的報身佛なりと見るのであるが、然しこれを十劫正覺の彌陀と稱し、この彌陀以上に久遠の彌陀を立て、報身彌陀佛の本地本體たる法身彌陀佛と見てゐる。淨土教も亦た眞如法身佛を立てるのである。斯くの如くであるから、眞如法身を本尊とし歸依の對象とするは別問題であるが、何れの宗派と雖も本尊佛の本地本質として眞如法身を立てざるものはない。此法身説を立てざれば哲學的に如來の永恒性を説くことは出來ないのである。

眞如法身觀に在りては眞如法身を極めて純理的に觀てゐる。従つて眞如法身は遙かに現象界から超越せる實在と考へられてゐる。故に本體たる眞如法身と現象界とを相對して、眞如は本なり現象は末なり、前者は能緣起の主體なり後者は所緣起の客體なりと區別し、亦眞如法身に隱顯を分ち隠れたる時を如來藏と云ひ、顯はれたる時を法身と稱する等、尙ほ眞如絕對觀には缺くる所がある。大乘佛教の本體即現象の理を盡究的に考ふれば、眞如法身に本末、能生所生等の區別あるにあらず、亦隱顯の差別あることなし目前の具體的實相その儘が眞如法身で常に顯然として隱るゝ時が無い。全法界全宇宙はその儘法身佛の如是實相であると觀、前の眞如法身觀を更に一步進めたものを法界法身觀と名けて見る。此法界法身觀の思想に基く佛身觀は、多少觀方の相異があるが、華嚴宗の事々無礙法界觀に基ける佛法身觀と、眞言密教の六大無礙

論に基ける佛身觀と我が禪の佛身觀であらう。此中禪の法身觀は卒直に法界即佛身なることを示してゐる宗祖の『眼藏』の光明卷に「佛祖の光明は盡十方世界なり」とあり、如來全身の卷に「この大千世界は如來全身なり」とあり、古佛心の卷に「いはゆる世界は十方みな佛世界なり非佛世界いまだあらざるなり」とあり、三界唯心の卷に「三界唯心は全如來の全現成なり」又「九山八海これ古佛の日月月面なり、古佛の皮肉骨髓なり」とあるは實に明白に法界法身觀を示されたものである。

佛敎とは佛法僧の三寶なりと云ふことが出来るが、その中佛敎の本質を尋ねれば終に一佛寶に歸する。然らば佛とは何ぞや、古來の名公案たる「如何是佛」の命題は實に佛の中の佛即ち佛の本質を探求し之を把握せんとした、これ畢竟佛敎の本質を知る所以であるからである。前述法身觀の發達は實に佛陀の本質、佛敎の本質を探求した思想史觀で、此本質の把握が眞佛敎の理想であるのである。